

第5回 滋賀県立信楽学園あり方検討会 議事概要

開催日時：2025年10月29日（水）17時～19時

場所：滋賀県庁北新館5－B会議室

出席委員：窪田座長、谷村委員、宇野委員、桑田委員、松岡委員

【論点1：信楽学園を県立施設として維持していく必要性はどのような点に求められるか】

- 家庭では生活リズムが乱れている子どもたちもたくさんいるが、生活基盤をしっかりした環境で整え、働くという流れを築くには、信楽学園での生活は大きな意義がある。
- 要保護性の高い児童は増加しており、特に障害があり、学校や家庭、地域の中で「生きづらさ」を感じ、困難を経験してきた子どもたちは、社会的に非常に弱い立場にある。行政はそのような子どもたちの支援を担う責任がある。潜在的なニーズは必ずある。
- 15歳以降の不登校や引きこもりの子どもたちがかなりの数いると感じているが、そうした子どもの受け皿としても、このような形態の施設は必要。
- 子どもたちにとっては、大人になっていく学び、社会と関わる・繋がる学びを、個別の時間を通してやっていくニーズ・魅力があるし、それを伝えていってほしい。
- 子どもたちは自己肯定感が低く、ストレス表現が苦手な場合が多い。信楽学園は安心できる大人がいて、愛着形成や成長を促す場となっている。夜のホームルームなど、生活を共にしながら寄り添う支援は、学校では困難な学園ならではの強みである。
- 不登校の生徒が増加する中、中学校卒業後の15歳の子どもの居場所として、少しでも早く生活基盤を整えられる環境がある信楽学園の役割は重要で、他では代替されない。

【論点2：子どもや家庭のニーズにも対応し、今後、信楽学園はどのような機能を果たしていくべきか】

- 生活の場における早期就職への意欲向上に繋がる取り組みを継続してほしい。
- 職業指導の強化として、自閉症や発達障害など特性のある子どもへの障害特性に応じた関わり方の専門性を高めていく必要。
- 信楽学園の強みは「働くこと」を通じた地域との繋がり。大規模な施設は必要なく、もう少し小規模な枠組みの中で、社会に送り出し、適応できるようにしていくことが必要。
- 被虐待児童など心理的な傷つきを抱える子どもへの個別支援として、医療（児童精神科分野）と福祉の連携強化ができるとうよい。
- 医療との連携は現場で非常に必要とされており、警察などを含めた多機関連携が取れていることは非常にありがたい。

- 県立施設としては、緊急対応（ショートステイ、一時保護）などの、民間では採算が取れず、対応しきれない役割を果たしてほしい。
- 入所を基本にしつつ、通所機能もあってほしい。
- 青年期の知的障害・発達障害への専門的な相談機能や、親離れ・子離れに踏み切れない家庭への支援、専門的な見立てにチーム支援ができるセンター機能が果たせるといい。
- 地域住民も利用できるカフェや子ども食堂、誰でも通える居場所、職場体験ブースなどを設置し、学校の職業見学等につながるようなオープンな施設になればありがたい。
- e スポーツやダンスなど、今の時代に合った子どもたちへの魅力を模索してほしい。
- 入所しながら学校に通うなど、多様なニーズへの対応もあってほしい。
- 高校生年代のニーズが適切なのかどうかや、通所により地域の子どもの支援を行うということも検討してはどうか。
- 生き方を育んできた信楽学園の歴史や「四つの願い」といったブランドをより積極的にアピールし、魅力的な施設に発展させるべき。

【論点3: 信楽学園を取り巻く状況にも対応し、施設の立地や施設のハード面の在り方をどのように考えるか】

- 信楽学園の廃止には反対。児童養護分野では施設が逼迫しており、ニーズがある中、利用者の選択肢が減るのは良くない。子ども分野は民間で対応しづらく、県が担うべき。
- 創始者の思いや積み上げてきた実践を大事に、県立施設としての運営を継続してほしいし、廃止とは全く思っていない。
- 創設当時と違い、信楽は陶器産業で実習生を次々受け入れる状況になく、今糸賀先生や池田先生がいても、建て替えでは全くないと思う。子どものニーズを調査して、子どもにとって何が一番いい形かを考えるべき。色々やると活気が出るし職員も来てくれる。
- 今の子どもたちは集団生活が苦手な傾向があり、大規模施設は求められていない。良さは残しつつ、運営形態や場所等様々な要素を変えていく必要がある。例えば近江学園のサテライトのように、小規模分散的に様々な地域に展開していくことも考えられる。
- 利用者減少や人材不足を考えると信楽での建て替えは難しい。県立施設としての事業実施であれば、近江学園との統合や一体運営ができないか。
- 近江学園との統合は、湖南市に施設が集中する懸念があるが、子どもたちにとっては「こういう選択肢もあるのだな」と実際に目で見てわかることや、交流を通じて良くも悪くもお互いに刺激になるということは意義として考えられる。
- 信楽学園の就労支援機能を近江学園として統合すれば、近江学園の作業場が有効活用できる。ただ統合だけで終わるのではなく、新たな機能は別の場所で別の形態で今のニーズを見ながら考えるのが一番いい。
- 信楽学園は地域に本当に溶け込んでいるが、だからそこに居続けなければならないのか

は疑問に思っている。オープンな施設にしようとするともう少し大きなところのほうがいいし、活動の中身も子どもたちが魅力を感じる内容が盛り込んでいくべき。

- できれば信楽の地での全面建て替えを行い、アクセスの改善や ICT 活用などハード面も含めて新たに積み上げてほしい。ただ、建て替えても、人が来づらかったり、オープンで風通しの良い活動や取組ができないなら、今の場所が良いとは言えない。
- 積み重ねた歴史があるので信楽学園へのこだわりは強くあるが、今後はより地域に近い場所、利用しやすい形が必要。信楽では、一人暮らしやグループホームで自立する前の段階での支援機能など、何らかの形で機能を続けてもらいたい。
- 一極集中型施設になるのは避けたい。県の北部と湖南市に2箇所の拠点を作り、それぞれ機能を果たすのがベターであるし、県北部には、子どものショートステイができる施設が見つからず、養護施設等をお願いすることが多いので最低2箇所はあった方がよい。
- より一層地域に根ざした施設のあり方を目指すというのは、同じ場所で信楽学園を建て替えることの一つの意義。一方で、現在の産業の状況などにマッチするかどうかや、アクセスの問題、土砂災害などで脆弱な場所であることなどが課題。